



# 吉田町長に聞く 「東日本大震災から 10年の節目を迎えて」

震災から10年の節目を迎え、吉田町長に聞きました。

## はじめに 「10年間を振り返って」 今、思うことは

「あつという間」だったという思いと「長かった」という思いが交錯しています。何よりも、命を落とされた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災された全ての皆さん、いまだ避難先で不自由な避難生活を強いられている皆さんに、心からお見舞い申し上げます。また、これまでご支援をいただいた国内外の皆さんに、お礼を申し上げます。これまでも必死に走り続けてきましたが、まだ避難生活を余儀なくされている方も多くおられるし、「ふるさと浪江」

の懐かしい街並みはすっかり変わってしまいました。しかし、前を向かなければなりません。もう一度新しい街並みを作り直し、にぎわいを取り戻すために全力を尽くすのみです。

## 発災当時は、どのような状況でしたか

あの日は、地震の後、町議会議長として災害対策本部に同席していましたが、全く情報が届かず、原発で事故が起きていることすら知りませんでした。翌朝、津波の被害に遭われた方の救助に向かう準備をしていたとき、非常用電源で復旧したテレビで避難指示が出されたことを知り、全町民を津島支所へ避難誘導しました。もし、あのときSP EEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）などのデータが迅速に提供されていたならば、皆さんに無用な被ばくをさせることはなかったし、助けられる命があつたのではないかと、本当に残念であり、無念でなりません。

## 避難中は、どのような状況でしたか

皆さんには非常にひもじい思いをさせてしまいました。議長として、国や県に支援をお願いに行きましたが、あちらも混乱していて支援を受けることはできませんでした。救援物資を載せたトラックが、原発被災地と聞いて引き返してしまうなか、地元の方から自宅の米や毛布を惜しみなく提供していただいたこと、新潟県からたくさん毛布が届いたこと、本当にありがたかったです。

情報がなかなか、町独自の判断で二本松市への避難を決めました。まさか6年間に及ぶとは思いませんでした。町民の避難先は全国に広がり、差別や嫌がらせもあつたと聞いています。過酷な避難生活によって体調を崩してしまう方も多く、震災関連死は440人以上のほりましました。その一方で、二本松市の皆さんをはじめ、全国からたくさん親切と温かい思いやりを受けました。本当に感謝しています。

## 一部避難指示解除について、どのような思いを持っていますか

避難生活が長くなり、故郷を取り戻すという強い思いから「まちのこし」という言葉を掲げ、町内の一部避難指示解除を決定しました。

馬場前町長の非常に大きな決断でしたが、私も全く同じ気持ちでした。今でも、あの決断は正しかったと確信しています。

そしてあのとき、必ず全町を解除して避難指示解除を果たすという決意を新たにしました。

## 今の復興状況はどのですか

これまでに医療、買物などの生活環境は徐々に整ってきました。中でも請戸漁港の再開は、震災前の日常を一つ取り戻したような思いで、特にうれしい出来事でした。

しかし、専門医や介護施設の不足など、まだまだ不十分な面も多く、急激な人口減少によって、将来、上下水道や町道などの維持、介護や福祉

といった町民サービスの提供が難しくなるのではないかと、いう危機感を持っています。今後は、新たな町民の移住・定住施策、特に、子育て支援策や働く場の確保、交流人口の増加に向け、新たな産業の発展に力を入れていかなければならないと考えています。

## 産業発展のために、具体的な取組は

まず、町の顔である駅前周辺の中心市街地再生に取り組みます。しかし建物だけ作っても意味がありません。新たな町のにぎわいを作るには、行政と民間が協力しなければ成功はありません。ぜひ町民の皆さんの、ご協力をお願いいたします。

そして、働く場の確保と交流人口の増加に向け、営農支援策として「カントリーエレベーター」（乾燥調製貯蔵施設）の建設、「耕畜連携」による農業振興を目指す畜産施設「復興牧場（仮称）」、「福島水素エネルギー研究フィールド」で製造する「水素」を利活用した「なみえ水素タウ

ン構想」などを進めたいと考えています。

## 帰還困難区域の避難指示解除に向けた考えは

室原・末森・津島地区に設定された特定復興再生拠点は、令和5年春の避難指示解除に向けて整備が順調に進んでいます。しかし、拠点以外の地域は除染の目途すら示されておらず「このままでは住民が将来設計を立てられない」と、解除に向けた方針を早急に示すよう、国に対し要望を重ねています。除染無き解除はありませんし、今後とも時間軸を含めた解除方針の提示を、繰り返し、強く要望してまいります。

## 町への想いを聞かせてください

浪江町民は、東日本大震災と原発事故によって全国にバラバラになってしまいました。だからこそ、町を皆さんがいつでも帰れる場所にした。空き地が増え、田畑は荒廃してしまいましたが、皆さん

が帰りたいと思う町を作っていくかなければならない。この時代を生きた者として、先人が守ってきたふるさとを復興し、次の世代へつないでいく重要な役割を感じています。責任は重大です。

## 最後に、町民の皆さんにメッセージをお願いします

10年前、突然私たちは日常を奪われ、今も「ふるさと浪江」の復興は道半ばです。しかし、「やまない雨はない」「明けぬ夜はない」。これからも皆さんが安心して帰って来られる町づくり、日々全力を尽くしてまいります。

今年3月、「道の駅なみえ」がグランドオープンを迎えます。地元の野菜、魚介類などの買物やそれらを使った料理を楽しむ。大堀相馬焼で地酒を飲みながら笑い、語り合う。震災前、当たり前にあった浪江の生活が再現できる場であり、町民同士の憩いの場、町民と浪江をつなぐ場になってほしいと思っています。今までも、これからも、浪江町は皆さんの故郷です。